

日本語感08 (日本語感というテーマからだいぶ外れますが。。。)

ゆとり教育 日教組教育 教育改革

先ほど、ゆとり教育に関連する番組をネット上で観た。  
<http://www.youtube.com/watch?v=aus8S3jy9PI>  
TBS 報道特集より。

ちょっとテーマが古いかも、時代に乗り遅れているかも知れないけど、少しこのテーマに関してコメントがてらに、意見を。

基本的にゆとり教育というものには以前から反対派の僕はこの番組を観てからも反対という意見には変わりが無い。

理由としては今後何回かに分けて述べていきたいと思う。自分の経験上のこともあるし、長年の歴史や統計でもわかることだと思う。ここで述べるゆとり教育の反対はあくまでも学校という現場における教育ということである。

今回は小学校という教育現場のことについて僕の意見をまとめてみた。

人格や性格などの大部分の形成は家族内、外でのさまざまな環境と経験によるもので、それは母親の胎内に宿った時から小学校に入るまでのことであるから、**小学校**ぐらいからは知識を増やしていく期間、また集団での生活、団体行動など少しずつ社会性という世界に慣れていく期間であってほしい。小学校ではゆとりではなく、さまざまな、多種多様な基礎知識を得てほしい。

なぜかという、しっかりとした基礎知識教育なしでは、個性を表現する知識や言葉が身につかない。やはり小学校では特にそれを教えてあげないといけないのでは？個性を尊重すると言いながら多様な基礎知識教育を怠ることは無責任ではないのか？これを魚釣りを教える例えで言うと、児童に魚釣りの仕掛けをつけた釣竿を渡して、「さあみんな好きなように糸をたらしてください。」と言っているようなものかも。これだったら教える先生は「別に魚が釣れなくても別にかまいませんよ～」と言っているようなもので。。。先生の意気込みはやはり、「出来るだけみんなに魚を釣って欲しい！」ではないだろうか？となるとやはり魚釣りの基本を教えてもらわないと、児童たちは先に進まない。それぞれの釣具の基本知識やさまざまな釣用具のこと、魚にも釣具以上にいろいろな種類があって、それぞれ違った習性を持っているよ～、釣り方にもこういうのがあるよ～などなどを教えないで

あろうか？その知識によって「ぼくは、わたしはこんなさかなをこんなしかけでこんなふうにつつてみた〜い！」とそれぞれの興味やつり方の工夫が違ってきて、そこで初めて個性などが生きてくるのではないか？そして実際に魚が釣れると、さらにある児童はその先の知識を知ろうとしたり、自分でもっと先を追求しようとするものではないだろうか？すなわち、基本ができていないと、基礎知識がないと**個性を活かしてあげることはできない**と僕は思う。個性を表現できる能力（繰り返しますが、基礎となる言葉や知識）を教えてあげないと、個性の尊重やゆとりというものはむなしなものになり、意味のないことである。逆に知識不足で表現できない方がよりつらく、また知識の乏しさにより大人になってからゆとりが無い生活を強いられるのではないかと思う。

その番組で先生は児童たちが意見ばかりを言う「ゆとり」スタイルをとってらっしゃったが、まずは先生が見本を見せたり、知識を児童たちと共有したりしない（教えない）限り、児童たちの意見や感想は空中を飛び交うだけのものになってしまうのでは？（ホームルールとちゃうんやから、先生が教えなあかんのんちゃう？）

このままだと教える側もそう知識を必要としなくなる傾向が見られるし、教えることももちろん楽である。児童たちも思うことを言うだけで済むので、楽であって、両者とも楽しいかも知れない。しかし、これは本当に小学校で受ける授業の教育なのであろうか？

意見のやり取りや、個人形成は直接的な人と人とのやり取りがある現場、それは休み時間であったり、家（家族内）や友人と遊ぶときに自然と育まれるものではないだろうか？学校がゆとりを取り入れたとばかりに、家庭内での基礎教育やふれあいなどがおろそかに（学校まかせに）なってしまう、これが不自然さをうみだし、知識や能力の低下と共に家庭が不安定になる原因にもつながりうるのかもしれない。

何事にも順序というものがある。喋ることを教えても、最初に言葉を教えずにどうするのか？知識なしではまともな意見も言えないし、感情の表現もできない。表現が出来ないとすると、もちろん表現力も育たない。“個性を育て”ても、それを表現できるだけの言葉や知識がなくては逆に個性が薄れる、または無いということにもなる。結局は個性を尊重せず、個性を育てない教育をしていることになる。基礎や基本なくして個性は生まれない。基本なくしてやりたい放題（意見言い放題）というのは単なる悪あがきだ。いや、これを撤回。基本や基礎知識などを教えずに、児童たちをやらせ放題にする小学校の先生方や教育機関が管理しているところを本当に学校と呼べるのであろうか？基礎知識を得ることができなかった子供たちはどうなるのか？先生方や教育機関は責任をとることができるのか？責任があるということを知ってほしいものだ。**児童たちには責任はない**。できるだけ早く PTA の方々が気付いてくださることを祈りつつ。

さて、これを日本語感に当てはめると。できるだけ複雑な言語を小さい時からしっかりと身につけた場合（15、16歳ぐらいまでにかな）、そうすれば他の言語（2ヶ国語目から）もしっかりと身につけることができる。応用がしっかり効くということだ。母国語があいまいに身につくと、その後勉強したり学ぶ言語もあいまいに身につくことになる。総合的に診ると日本語は複雑で難を極める。（理屈からすると、難しいことを習得すると簡単なことに会った場合、そう苦勞するものではない。しかし逆に簡単なもの習得していて難しいことに会うとそこそこの苦勞が必要である。）日本語の発音は単純なので、他の言語を学ぶ際に発音や聴き取りには多くの日本人の方が苦勞するだろうが、それを乗り越え、要領さえつかめれば、日本人というのは外国語を意外と柔軟に取り込める基礎が備わっているということを知っていてもらいたい。それは日本語が基礎からちゃんと身につけているという条件を前提にするが。（自分自身反省。自分に言い聞かせてます。）

2009年9月2日

西田賢司

サンホセ、コスタリカ